

カクテル・パーティー

大城立裕



理論社

カクテル・パーティー

大城立裕

理論社

著者紹介

大正14年9月19日、沖縄県中城村に生まれる。
上海の東亜同文書院大学中退。沖縄県教育庁
参事兼沖縄史料編集所長。昭和42年上期「カ
クテル・パーティー」で第57回芥川賞受賞。

著書：『対馬丸』（理論社）『小説琉球処分』
『まぼろしの祖国』（共に講談社）『内なる
沖縄』（読売新聞社）『般若心経入門』（光文
社）など。

住所＝沖縄県那覇市首里汀良町3-59



0093-90231-89

© Tatsuhiko Oshiro 1982 Printed in Japan

カクテル・パーティー

一九八二年十一月 第一刷
定価／九八〇円

著者／大城立裕
おしろいたつひろ

制作／小宮山量平

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五・六

電話（03）二〇三・五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九一九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

印刷・誠和印刷

カクテル・パーティー
もくじ

二世

91

棒
兵
隊

67

龜
甲
墓

5

逆光のなかで
157

カクテル・パーティー
181

シヨリーの脱出
259

あとがき	330
初出一覧	334

装画 内堀勉
装幀 平野甲賀

亀甲墓

かめのこうばか

実験方言をもつある風土記

なにしろ、ウシにとっても善徳にとっても、百坪のなかの十五坪の萱^{かや}ぶきの家のなかのことしか考えない日常だったのだ。沖縄県とか大日本帝国とかアメリカとかいうものは、出征兵士を見送ったり遺骨を出迎えたりする日に考えるだけだったから、あの音がそれらと関係があるなどとは、さらに気がつくはずがなかった。

まず、ドロロンと空気をぶちこわすような音がして、家がゆれた。山羊小屋では、角をはやしたのが、つながれた杭のまわりをあわてて三回ほどはしり、縄で首をうんとしめつけた。善徳がそれを見てあきれていると、門のそとにモッコ一杯の草をかついだ男があらわれて、声をとばした。

「じいさん、艦砲射撃だ、艦砲射撃だ。いくさど」

善徳は、藁^{わら}蓆^{しろう}を編んでいる手をちよつと休めて、

「カンポーサバチては何だ」

あのばかみたいな音とサバチ（櫛）と何の関係があるだろうといぶかる。

「サバチでない。シャゲキだ。艦砲さあ」

「カンポーては何だ」

「軍艦の大砲だ、どこかにうちこんだんだ。いくさの来たど」

男は対話をやめて石垣のむこうに消えた。善徳は手のものを全部つきはなすと、

「おい、ばあさん。艦砲だ、艦砲だ。いくさど」

台所へあびせて、たちあがった。

ウシは、台所のまっくらな土間に桶をすえて、豚の餌の諸汁いもしるをかきまわしていたが、

「へ。カンポー。いくさ。きよう来るてか」

「おお、来るさあ。はやくにげんと。こどもたちは、はあ」

「あした卒業式があるから、その練習て」

ウシは、いそいで軒端まででて空をあおいだが、なにごともないので、また桶にもどった。

「豚の腹は満たしておかんと」

それからウシが裏の豚小屋の餌桶に諸汁をあけとばしていると、また二発ほど、ドロロン、ドロロンと鳴った。

「ばあさん。なにしてるか。命すてると孫たちにすまんど」

善徳は、米をいれた石油罐をモッコにのせている手をやすめて、裏座敷の窓から、どなった。「はあ、ますます死ぬもんか、じいさん。豚の腹は満たしておかんと、逃げたらいつまで放っておくかわかりはせんのに」

「そんなら、ついでだ。山羊の草もみんなおろして、そばにまいてとらせ。はあ、やっかいなイクサの来くさったもんだ。……おい、孫たちの学校道具は、どれだけもっていくかね」

ウシは、それをきかずに表の井戸へまわり、手にいっぱいした諸汁を洗いおとしながら、「じいさんよ。栄太郎つれてきて、手つだわせんかね。あんたひとりでは無理だろうのに」

すると善徳は、かかえていた毛布を床にたたきつけて、軒端にとびおり、

「なにいッ。またするか、あのくされもんの話」

「くされもんであってもなくても、あんた、うちは若いもんがおらんのに、いまごろ片手はなくても、いい助けになるとおもったほうがいいど」

「お前も、くされもんだ。不義もんの娘のねんごろに手つだわせて、いくさからにげたと世間にいわれて、生きられるか」

「はあ、生きられるさあ。ねんごろでもなんでも、力になるもんは使うことさあ」

またドロロンと鳴った。つづいて、西の山の裏から、ブルルンと音がしだいに大きくなって、東へとび去った。善徳が白毛まじりの眉をよせてそれをみあげていると、また門に、こんどはじいしがあらわれて、

「善徳じいさんよ。カラスの鳴きくさったど。山は、どこからきたか、カラスのいっぱい、バタバタしているど。これは、大いくさになるど。はあ、はやくにげろう」

「いくさは、どこから来るかね、山里のじいさん」

ウシがきいた。

「はあ、アメリカから来るさあ」

「アメリカはわかつているがさあ」

「海みてみれ。ゆうべのうちに軍艦ばかり、たいへんだ。あれだけから大砲どんどんしたら、はあもう」

「あんたらは、どこににげるかね」

「うちは、山原やんばににげろうかとしているがね」

「山原は遠いなあ」

「遠いからいいんだなあ。艦砲もとどかんど」

沖繩島が大陸であるかのような相槌を、ウシは聞きながして、

「うちは、どこにがいいかねえ、じいさんよ」

「ふれもん。そんなことは、あとからだ。はやく、山羊に草くれて、荷物からくくろう」

山里のじいが消える。ウシが、手足の水を切ってあがり風呂敷に着物をくるんでいると、孫の文子と善春が、走って帰ってきた。六年生と四年生だ。

「じいさん。ばあさん。戦争ど、戦争ど、アメリカと戦争ど。はやくにげれと。にげれば勝つと、先生が」

「学校はどうするてか」

「学校は戦争だからないさあ」

「卒業はせんのか」

「戦争だのに、卒業であるか。バカだね、じいさんは」

「そうか。先生はどこににげるてか」

「どこにてもいわなかったよ。家のひとつしよににげれ。戦争の勝ったら、また学校するか
らて、いったさ」

また、ドロロンと鳴る。

「文よ。栄太郎よんでこい」

ウシが、鍋を土間から床にガチャンとあげながら、どなると、文子がもともと大きな眼をむけて、

「栄太郎おじさん？ いいのか、ばあさん」

「あれ、みい。孫はもう大人だ」善徳が、あらためて怖い顔をつくる。「いくら戦争でも、不義は不義だ。だいじな孫あずかって、ふらちみせたら、息子にもすむか。お前は自分の血を分けないから、そんなこというて」

「だれの血でもいいさあ。命が第一さあ。命たすかるためてば、だれが物いうか」

「だれが命すてるていうたか。にげるていつてるでないか」

「して、あんたひとりで、これだけ担いでいけるか。どこににげるわけか」

「この年になって、どこににげるか。いつ命すてるか、お元祖といっしよに墓にはいるがいいさあ」

「墓にはいるのか、じいさん？」

善春が、頓狂な声をあげる。

「墓はいいど、善春。墓はお元祖の大きな家だ。お元祖が守ってください」

「おもしろくないか」

「何のおもしろいか。おもしろいもんはお元祖のみんな払ってくださいさあ」

「そんなら、ますますのことさあ」ウシが、また口をはさむ。「墓の門をあけるのが、じいさん

ひとりで成るかあ。あんな重い石の……善春、よんでこい」

「うん」

善春がとびだそうとするのへ、

「いくな。片手しかないやつが、なにできるか。あの墓石は、わんがはめたとだ。自分のはめたもんは、あけらるるためしだ」

「いくつの年にはめたてか。七十もこした年寄りがでて。片手でも、若いもんなら気合いのかか

る。ねんごろの家のためとおもえば、なおのことさあ。いまだき世間に若いものの頼りがあれば、片輪でも果報のうちでないか。いけ善春」

「なにイッ」

善徳のことばがつまり、善春がかけだそうとすると、門から金切声をあげてきた娘のタケが、一人娘の五歳になる民子をひきずるようにして、

「ばあさん。あんたら、どこににげるて？ いっしょに行かれよう」

善徳のあたまに一瞬にしてうかんだことは、自分が日ごろ文句ばかりたれているせいか、娘が血のつながらないウシのほうへさきによびかけたことへの不満と、そのふらちな娘のつれてきた孫のおびえたような眼つきのいとおしきで、そう一緒にいたにこられては、とっさに何をいつていか、ちよつとまごついていると、またドロロン、こんどはかなり近いらしく子供が眼をつぶるほどの音だが、同時にドロロンにはじきだされたように門からとびこんできたのは、なんと片腕だけで毛布やら鍋釜のたぐいをひつかつた男だ。善徳は、その急テンポでゆれる空ッぽのシャツの袖に笑われている心地さえして、

「お前は、お前は」

と荷物のことを忘れているようすなので、ウシが、

「殺すなら墓までもつていってから」

「なにッ。墓で殺すと？ 狂れ物言いしくさって。死んでも、そんな物言いかたすると、お元祖

の前にはいっしょにおいておかんど」

ウシは、あッとおどろいて、善徳の顔をうちまもる。ここの百姓は、「殺す」ということばで「なぐる」の意味をつよめることがあるので、かるくいったのだが、「墓で」とは添えことばがわるかった。あわてて、

「ちがう、ちがうさあ。それは……」

いいなおそうとすると、タケが、

「墓にいくのか、ばあさん。そんなら」

と栄太郎をうながす。栄太郎は、ガラランと荷をおろし、

「棒があるだろ、じいさん、棒が」

と勝手に納屋へいって、ひっかきまわして、天秤棒とモッコとをもってきて、自分のもつてきた荷と、この家の荷とをそろえて、タケに手つだわせてくびり、棒を肩にのせると、にがい顔でみていた善徳が、庭にとびおりて納屋から鍬をだしてきた。

「お前、これもいれろ」

「じいさん。鍬はなにするか」

「くされもん。お前らは百姓であるか。家移るのに、鍬もたんで、何で食いものあがなうか」

栄太郎は、だまってモッコを解いてあける。善徳はおしこみながら、

「わったは、もっと荷をもっていくから、先になっておけ。お前がは墓の門はあけきらんど。墓はか